

# くもと草

小川未明

青空文庫



ちようど赤あかちゃんが、目めが見みえるようになつて、ものを見みて笑わらつたときのように、小ちいさな花はなが道みちばたで咲さきました。

花はなの命いのちは、まことに短みじかいのであります。ひどい雨あめや、強つよい風かぜが吹ふいたなら、いつなんどきでも散ちつてしまわなければならぬ運うんめい命めいでありました。

しかし、このはかない間まが、花はなにとつてまたこのうえの楽たのしいことがないときだつたのです。晴はれやかな陽ひの顔かおも、またあのやわらかな感かんじのする雲くもの姿すがたも、みつばちのおとずれも、その楽たのしいことの一つでありましたが、その中なかにもいちばん喜よろこばしい心こころの踊おどることは、美うつくしいちようのどこからか、飛とんできて止とまることであります。

この道みちばたに咲さいた小ちいさな花はなは、この世よの中なかに、ぱつとかわいらしい瞳ひとみを開ひらいたときからどんなに、ちようのくることについて空くう想そうしたかしれません。

「自分じぶんのような人ひと目めをひかない花はなには、どうして、そんなに空くう想そうするような、きれいなちようがきて止とまることがあるう？」

ここう、花はなは悲かなしく笑わらつたこともありました。重おもい荷にを車くるまに積つんでゆく、荷に馬ば車しゃの足あし跡あとや、轍わだちから起おこる塵じん埃あいに頭あたまが白しろくなることもありました。花はなは、自分じぶんの行ゆく末すえにいる

いろいろな望みをもたずにはいられなかつたのです。

道ばたでありますから、かや、はえがよきて、その花の上や、また葉の上にもとまりました。花は、毎日、日暮れ方になると、ブンブンと鳴く、かの音を聞きました。またあるときは、はえの汚れた足で体をきたなくされることをいいました。しかし、それをどうすることもできなかつたのです。

ある日のこと、怖ろしい顔つきをした大ぐもが、どこからかやってきました。

「かわいそうに、かや、はえが毎日ここへはやってきませんか？　そして、あなたを苦しめはしませんか？」と、くもは、さも深く同情をしたような言葉つきでたずねました。

花は、くもが、顔つきに似ず、やさしくいつてくれますので、なんだか涙ぐましく感じました。

「やっつてはきますが、べつに、わたしをいじめはいたしませんから我慢をしています。」と、花は答えました。

くもは、大きな光る目を怒らして、

「それは、悪いやつらです。私が、征伐をしてあげます。あなたは、そのかわり、しば

らく窮きゆうくつ屈おもな思いをしなくてはなりません。「と、命めいれい令れいするようについて、くもは、ろくろく花はなの返答へんとうも気きかずに、細ほそい糸いとで葉はと葉はとの間あいだや、茎くきと茎くきとの間あいだに網あみを張はりはじめました。

花はなにとつてこのくもの巢すが、どんなに、かや、はえのくることより迷めい惑わくであるかもしれなかつたのです。

花はなは、この厚顔あつかましくもが、せめて花はな弁ひらだけ、糸いとでしばりつけないのを、せめてものしあわせと考かんがえていました。そして、くもは、横おうちやくもの着ちやく者ものであつて、かや、はえがこな  
いときは、根ねもとの方ほうに隠かくれて眠ねむっていました。

ある日ひ、きれいなちようが飛とんできました。そして、花はなの上うえにとまりました。

「なんて、いい香においのする、かわいらしい花はなでしょう。わたしは、あなたのような香においが大好きだいすです。いままで、いろいろな花はなの上うえにとまりましたが、こんなになつかしい香においを吸すつたことがあります。どうか、お友ともだちになつてくださいね。」といいました。

そのとき、花はなは、どんなに喜よろこんだでしょう？ それは、びっくりしたほどでした。それから、ちようと花はなは、親したしくなりました。ちようは飛とび立たつたかと思おもうと、まもなく、また自分じぶんを待まっている花はなの上うえに帰かえつてきました。

そのとき、いままで眠<sup>ねむ</sup>っていたくもが、起<sup>お</sup>き上<sup>あ</sup>つて、すぐ花<sup>はな</sup>のところまできていました。そして、ぴかぴか光<sup>ひか</sup>る目<sup>め</sup>で、じつとちようを見<sup>み</sup>つめていました。この有<sup>あ</sup>り様<sup>さま</sup>を知<sup>し</sup>ると花<sup>はな</sup>は、急<sup>きゆう</sup>に小<sup>ちい</sup>さな心<sup>しん</sup>臓<sup>ぞう</sup>がとどろきました。しかし、ちようは、ちつともそのことを知<sup>し</sup>りませんでした。

「ちようさん、あなたのきれいな羽<sup>はね</sup>をお気<sup>き</sup>をつけなさい。細<sup>ほ</sup>い糸<sup>いと</sup>にかかりますよ。」と、花<sup>はな</sup>は、ちように注<sup>ちゆう</sup>意<sup>い</sup>をしました。

ちようは、びつくりしました。そして、目<sup>め</sup>をあたりにくばりますと、なるほど、細<sup>ほ</sup>い糸<sup>いと</sup>が葉<sup>は</sup>の間に、茎<sup>くき</sup>と茎<sup>くき</sup>の間に、かかつていて、それには、かや、はえの死<sup>し</sup>骸<sup>がい</sup>が、あるかなきか残<sup>のこ</sup>っているのをはじめて見<sup>み</sup>ました。

「ほんとうに、油<sup>ゆ</sup>断<sup>たん</sup>がなりませんのね。あなたが注<sup>ちゆう</sup>意<sup>い</sup>してくださらないければ、もうちよつとでわたしは、網<sup>あみ</sup>にかかるどころでした。」と、ちようは、花<sup>はな</sup>弁<sup>びん</sup>の上<sup>うえ</sup>にとまって、心<sup>こころ</sup>から感<sup>かん</sup>謝<sup>しゃ</sup>しました。

「ご機<sup>き</sup>嫌<sup>げん</sup>よう」

日<sup>ひ</sup>が暮<sup>く</sup>れかかる前<sup>まえ</sup>に、ちようと花<sup>はな</sup>とは、たがいにこういって、別<sup>わか</sup>れを惜<sup>お</sup>しみました。ちようが、見<sup>み</sup>えなくなると、怖<sup>おそ</sup>ろしい顔<sup>かお</sup>つきをしたくもが花<sup>はな</sup>の上<sup>うえ</sup>にのぼってきました。

「おまえは、なんで、ちようにいらぬ注意ちゆういなどをするのだ。」と云つて、花はなに向むかつて、くもは、なじりました。

「あなたは、かつてに、私わたしの家いえへ巢すを張はつてゐるのでしよう。どうか、早くはやここからほかへいつてください。」と、花はなは、かえつて、くもに向むかつていつたのです。

すると、くもは、たいそう怒おこりました。

「生意なまいき気きな、どうするかみておれ……。」と云つて、こんどは、かわいらしい花はなの頭あたまの上うえまですつかり網あみを張はつてしまいました。

ちようは、翌よくじつ日じつのこと、花はなのいい香かほりを忘わすれずに、またやつてきました。そして、なこころに心こころなく花はなの頭あたまの上うえにとまろうとすると、

「だめです、だめです！ 早くはやお逃にげなさい。」と、花はなは苦くるしい中なかから叫さけびをあげました。

ちようは、このいじらしい有あり様さまを見て、驚おどろいて飛とび去きりました。二、三日にちしてから、ちようは花はなの身みの上うえを氣き遣づかつてきてみました。しかし、もうそのときは、小ちひさな花はなは枯かれていました。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

※表題は底本では、「くもと草《くさ》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2012年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# くもと草

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>